

京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P5561 参照



※ P5568 参照

2021.7
No. 757

目次

任期中の基本方針

- －世界に輝く研究大学を目指して－ 5561
総長 湊 長博

〔大学の動き〕

- 民間ファンドによる大型奨学金プロジェクト
(Create the Future Project)に係る記者会見を
実施 5568
- 京都大学春秋講義(令和3年度春季講義)のオン
ライン講義を公開 5568
- 第78回京都大学未来フォーラムを開催 5569

〔部局の動き〕

- 京都大学OCWウェブサイトのリニューアルを実施 5571
- 火山研究センター復旧記念式典を挙行政 5571
- Psyche Navigation System(サイキ・ナビゲー
ション・システム)という新たなテクノロジーの開
発を開始 5572
- URAが第79回ASEAN科学技術イノベーション委
員会(ASEAN COSTI-79)にて、STI Coordinator
育成に関する発表を実施 5573

〔寸言〕

- 「地球の危機をチャンスに変えよう」 中江 公人 5575

〔随想〕

- 多様性を楽しむ 5577
名誉教授 吉川 左紀子

〔洛書〕

- 学際分野における人との出会い 鎌田 真由美 5578

〔栄誉〕

- 岩井一宏 医学研究科教授が日本学士院賞を受賞 5580

〔話題〕

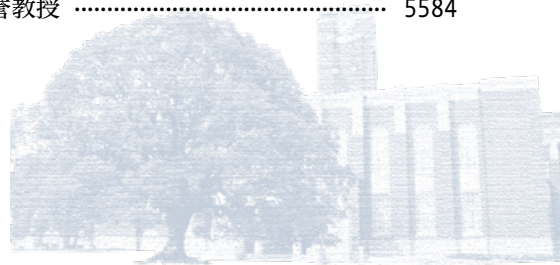
- 令和2年病院長賞表彰式を挙行政 5581
- 新入生3000人にライブ型オンライン救命講習会
を実施 5582

〔訃報〕

- 長尾 真 元総長 5583
河合 雅雄 名誉教授 5584



京都大学



「任期中の基本方針－世界に輝く研究大学を目指して－」について

2001年に制定した京都大学の基本理念，2015年に策定した「京都大学の改革と将来構想（WINDOW構想）」，そして2017年に指定を受けた指定国立大学法人構想を踏まえ，私の総長任期中に新たに注力する取り組みを中心に，基本方針をまとめました。2020年10月の総長就任以降，執行部内で議論を重ね，まず2021年3月に学内において報告し，このたび，より多くの皆様にご覧いただきたくここに公開します。

世界に伍する研究大学を目指し，教育・研究支援体制の再構築，人材多様性の確保，財政基盤の強化という3つのビジョンのもと，教育と学生支援，教員の研究活動支援，業務運営体制の改善，施設，組織運営，基金活動の6つの課題について，それぞれ方向性を示しています。

今後，全教職員一丸となって，この方針に基づく具体的な取り組みを着実に実行していきます。また，大学を取り巻く状況の変化に応じて，本基本方針を改定していきます。皆様のご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。



京都大学総長
湊 長博

― 任期中の基本方針－世界に輝く研究大学を目指して－

本学では，2017年における指定国立大学法人の指定に当たり，全学での議論を経て世界に伍する研究大学を目指すための中長期的基本戦略を策定した。この基本戦略自体は，第4期中期目標・中期計画期間においても維持されるべきものとする。他方，総長就任以来，理事を含む執行部内での意見交換を踏まえて第4期に向けた職務遂行方針を検討してきたが，その中で従来の取り組みを変更すべき点や新たに必要となる取り組みが想定されるため，それらを中心に任期中の職務遂行の基本方針として本文書を取りまとめた。本文書に記した事項につ

いては、できる限り第4期中期目標・中期計画案に反映したいと考えている。

なお、中期目標・中期計画においては、従前からの計画の変更や新規計画だけでなく、継続すべき計画も含まれるので、本文書の内容がそのまま中期目標・中期計画案を意味するわけではない。本基本方針については、今後、状況の変化や新たな必要性に応じ、全学的議論を十分に踏まえた上で、逐次改定していくつもりである。

基本的な考え方

本学の基本理念に従った職務遂行を進める。その中でもとりわけ、自由の学風の下で独創的な研究を推進するため、多様で有為の人材が世界中から本学へ集うことのできる魅力ある教育・研究環境の整備と、自律的な運営を可能とする基盤の強化に注力したい。

魅力ある教育・研究環境を実現するための方策として、学生の修学環境や教育内容・体制の改善とともに、教員の教育・研究活動を支援する体制の整備や処遇の改善に取り組む。特に、学生・教員の多様性の確保は重要であり、優秀な海外留学生の増加や若手・女性教員の増員・育成に充分配慮する。また、自律的な運営を行う基盤の強化のため、社会への発信力の強化、産学連携活動や基金活動の一層の推進に積極的に取り組む。これらにより、本学の社会における存在感を高めるとともに、社会からのより大きな支援獲得へと繋げたい。

以上の基本的な考え方を具体化するための取り組みについて、主に従前からの変更点や新たな取り組みを中心に以下に述べる。

具体的な取り組み

I. 教育と学生支援

学部・大学院において、熱意に溢れ適性に優れた多様な入学者の確保とその育成のため、学生の生活支援と福利厚生向上、学生の希望と時代のニーズに対応した教育内容・体制の改善を進める。

— (1) 学部教育

- 入学者選抜等；女子学生の比率向上に向け、中・高生や保護者への働きかけを強化するとともに、Kyoto iUP を拡充して優秀な海外留学生の増加を図る。入試については、現在の制度を当面維持するが、特色入試については、その趣旨と入学後のカリキュラムの整合性や同入学者の修学状況及び学部卒業者の追跡調査に基づいて適宜検証を進める。
- 学部入学定員と転学部・転学科；学部の入学定員については、中長期的な社会の要請や学術領域の変化への対応を含めて、引き続き検討する。また、入学後の学生の進路志望変化などに適切・柔軟に対応できるよう、転学部・転学科制度の再検討を進める。
- 学部カリキュラム改革；各学部の要卒単位数が適切であるか再検討を行う。特に専門科目の増加に伴い、教養・共通教育については、一部で学生が外形的な単位数収集のみに終始し

てしまうという懸念がある。教養・共通教育がより効果的・魅力的なものとなるようカリキュラム改革を進めるとともに、要卒単位数や必修科目などについて再検討を進める。

- 短期海外留学；海外留学促進のため、各学部の要卒単位数の再検討、海外大学との単位互換の拡張などを積極的に進める。語学留学の単位化を推進し、単位認定を伴わない短期留学及び受入れについては再検討を行う。

— (2) 大学院・専門職大学院教育

- 給付型奨学金制度の拡充と整理；従来の日本学術振興会特別研究員や TA / RA 制度に加え、新たに文部科学省による博士後期課程への給付型奨学金の拡充が予定されているが、並行して大学の独自基金による奨学金制度の導入により、全体としてバランスのとれた大学院生の生活支援を拡充し、優秀な学生の大学院進学を促進する。複雑化する各種奨学金制度の趣旨と内容（生活支援、研究支援など）を整理し、その情報をわかりやすく学生に開示・説明できる体制を作る。
- 大学院定員と専攻組織の改革；大学院定員の管理柔軟化を引き続き文部科学省に要求していくが、現行定員が社会的要請や学術動向の変化に適切に対応できているかについての検証を進める。専攻・講座の統合・集約化（大講座制など）等の組織改革とそれに応じた大学院課程のカリキュラム改革を進め、全体として効果的な研究者育成プログラムを構築していく必要がある。
- 優秀な留学生の獲得；海外の諸拠点も活用しつつ、大学院研究科全体としての統一的な学生リクルート活動を展開し、受け身ではなく積極的な海外の優秀な大学院生の獲得を推進する。そのため、次に述べる大学院教育支援機構（仮称）の内部にリクルーティング・オフィスを設置し、全学大学院統一ポータルサイトの一層の充実化を図るとともに、現行の留学生の授業料・入学料免除や奨学金システムを再検討して、優秀な留学生の確保につながる仕組みへ変更する。
- 大学院教育支援機構（仮称）の設置；上記の諸活動に加え、大学院共通科目の充実、各種大学院学位プログラム（卓越大学院、ジョイントディグリー、ダブルディグリーなど）の統括などを一元的に進めるために、全学組織として Graduate Division に相当する大学院教育支援機構（仮称）を新たに設置する。これにより、各研究科の多方面での教育・研究活動における連携協力を推進する。

— (3) 学生生活

- 学生相談窓口の強化；学部・大学院を問わず、学生の生活、心身の健康、修学状況などにかかる相談のニーズは急速に増加しており、学生総合支援センターでの対応は限界を超えてきている。少なくとも各キャンパスに、学生の相談・支援全般に対応しうる窓口体制を整備する。
- 学生サービス環境の改善；老朽化している福利厚生施設の更新など、学生サービス環境の改善を図る。

II. 教員の研究活動支援

国内外の若手・女性を含む多様で卓越した研究者人材の獲得、及びそのために、教員が十分に教育・研究活動に専念できる環境の整備が最重要課題であると考える。

― (1) 研究支援体制の再構築

- 研究遂行の支援にかかる要員（事務系秘書、技術系職員、URA など）を増員・拡充し、また、その雇用と運用については全学的に一元化された体制を整備して、これにかかる教員の負担を軽減する。
- 全学の諸会議・委員会などの設置、構成、運用方法の見直し、事務諸手続きの電子化を進め、教員の教育・研究エフォート率の実質的増加を促進する。
- 部局教員の基礎的研究経費配分の増加を検討するとともに、URA による競争的研究費獲得支援、競争的研究費応募にかかるセーフティーネットのための学内研究費の仕組みなどの強化を進める。

― (2) 教員の処遇改善

- 人事給与制度を改正し、民間の研究職の給与額も参考にしつつ、教員の教育・研究における業績が透明性の高い評価に基づき適正に処遇に反映される制度を導入する。
- 現在極めて多数に及ぶ身分の不安定な有期雇用教員（特定教員）については、可能な限りテニユア・トラック制への移行を図り、適正な業績評価に基づき正規教員へのキャリアパスの拡大を図る。
- 保育室など、若手教員の研究支援環境の整備を進める。

― (3) 教員の多様性の確保

- 本学の現状では、女性教員、若手教員、外国人教員の割合はいずれも全国主要国立大学で最低のレベルにあり、大学の社会的信頼性や将来性において大きな懸念材料となっている。外部資金の導入、教員・職員間の定員枠の柔軟化、教員定員再配置の仕組みの検討など様々な方法により、教員の多様化を推進する。
- 各学系において現況を把握し、その状況に応じて適切な若手・女性教員比率の目標設定を行う。

― (4) 教育研究組織の改革

- 教育研究組織の多様性が本学の特徴であるが、各組織の規模に非常に大きな開きがあることが事務の効率性やコンプライアンスなどの点でしばしば問題となっている。学術領域の変化や社会的要請を踏まえて各教育研究組織の設置目的と現況評価を改めて検証し、必要に応じて組織再編や統合を促す。
- 学域・学系制の趣旨を最大限に活用しつつ、より柔軟で機能的な教育研究組織の改編を進める。

― (5) 研究活動の国際化と成果の発信

- 海外拠点の役割・機能を検証し、教育・研究の国際展開に資する効果的な体制に整備する。
- On-site Laboratory については、自律的運営を確立し継続的な国際共同研究の拠点化を目指す。
- 海外重点研究機関との戦略的パートナーシップにより、形式的な大学間学術交流協定から、より実質的で恒常的な国際共同研究の強化へ移行する。
- 人文・社会科学分野の教育・研究成果に関する社会的発信力を高めるため、ハブとなる組織の整備などを行う。
- 図書館機構による研究成果の自律的なオープンアクセス方針を推進する。

― (6) 産学共同・連携活動の推進

- 産官学連携本部の機能の充実・強化と透明性の確保を進め、特に全学の教育研究組織・研究者とのコミュニケーションを促進する。学内研究者との情報交換の窓口を拡大し、大学発ベンチャーを含め学内シーズの発掘・支援機能を高める。
- 民間からの博士後期課程学生の在籍受け入れなど、大学院教育を基礎にした民間との共同研究の連携支援を拡大する。

III. 業務運営体制の改善

コンプライアンスに最大限の配慮をしつつ効率的で機能的な業務運営を行うために、事務組織や雇用体系の抜本的改善と事務職員の政策立案能力向上に向けての取り組みを進め、全体として非効率の経費の削減に努める。

― (1) 本部と部局の事務改革

- 事務本部については、縦割り意識の解消、部門間の連携と情報共有の強化により、効率的な業務運営ができるよう組織再編を進める。
- 事務本部の事務組織再編に応じて各部の学内予算再配分機能を見直し、適正で効果的な予算配分と執行体制を整備する。
- 現行の共通事務部のあり方を再検証し、事務本部及び部局事務部との効率的な役割分担と協力体制をつくる。
- 新規に構築する研究支援体制と各事務部との連携を強化し、両者のシームレスな関係を構築する。

― (2) 全学機能組織の見直し

- 全学機能組織の必要性、役割、適正な規模を再検証し、必要に応じて統廃合を進める。
- 各機構を支える事務組織の役割についても明確にし、必要な規模に見直す。

― (3) 財務改革

- 各事務部への慣例的、固定的な予算配分方式や単年度予算消化体制などについては、抜本的な見直しを進める。
- 総長裁量経費、全学経費、アクションプランなどの本部組織の基盤的経費については、慣例的配分を抜本的に見直し、役割や運用の評価に基づき適正な配分を行う。
- 部局に対し各種経費（機能強化経費、施設維持経費など）で措置される予算や、新たに基盤化された予算についても、事業内容や実績の評価を踏まえ必要に応じて運用の見直しを進める。

― (4) 職員の人事給与制度の改善

- 職員の昇給・昇格については、一律の年功序列的運用によることなく、職責を明確化し、その業績評価に基づく運用を基本とする。これにより、職階と給与の逆転現象など職員の労働意欲の阻害につながるような弊害を防ぐ。
- 職員のキャリアパスとして、一般事務職と総合職のコースを作り、職員の事情によりコース変更も可能な制度を検討する。
- 特定職員（URA、法務職、技術職など）について、本人の希望と実績に基づき一般事務職と並立の正規職員としてのポストを創設する。

― (5) 医学部附属病院の管理運営

- 先端医療研究開発機構（iACT）を拠点として、企業治験を含む臨床試験の遂行と支援機能を充実強化し、世界的に遅れを取る我が国の先端臨床研究のリーダーシップをとる。
- 産官学連携本部と密に連携して大学出資事業や企業連携などを最大限に活用し、医療情報や機器開発などの事業展開を積極的に進めて、医学部附属病院の財務基盤強化を進める。
- 教員兼任制による病院管理運営と事業推進には限界があり、専任担当者の採用などを含めて今後の体制についての抜本的な検討を始める。

IV. 施設

大学の施設整備計画について、その資金計画を含めて検討を進め確定していく。

― (1) キャンパスマスタープラン

- コロナ禍での教訓とポストコロナ時代の想定を踏まえ、施設の安全性、機能性の向上に向け各キャンパスの既存マスタープランを再検討する。特に、最大の学生数を収容する吉田南キャンパスの整備が喫緊の課題である。

― (2) 創立 125 周年記念事業

- (1) の事情を勘案し、当初の事業案を見直し、国際的にも魅力あるキャンパス環境に資する学生の福利厚生施設など明らかに必要性の高い施設への変更案を速やかに検討する。

V. 組織運営

各レベルでの組織運営の責任の所在の明確化と、大学運営を担う次世代の人材育成の仕組み作りを進める。

― (1) 部局長の職務

- 部局長が部局運営の一義的責任者であることを明示し、部局長の裁量性を拡大するとともに必要な全学的情報が十分に提供される仕組みを整備する。また、これに対応して、各部局には部局長の任期についての検討を促す。

― (2) 総長・役員会

- 総長・役員会は教育・研究活動にかかる全学的環境整備に責任を負うが、特に全学機能組織の整備と運用、全学教員部における人事と人員配置に一義的責任を持つ。
- プロボストは、次世代の大学運営人材の養成に十分に配慮して、戦略調整会議の構成員の選定と運営を進める。

VI. 基金活動, その他

大学の財務基盤強化に向けて、基金活動、同窓会活動のための事務体制を充実強化する。特に今後は、法人に加え、個人を対象とする基金活動に重点を置き、海外を含む地域同窓会、保護者会やファンクラブの組織化と広報活動を強く推進する。

令和3年3月5日

京都大学総長

湊 長博

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

民間ファンドによる大型奨学金プロジェクト（Create the Future Project）に係る記者会見を実施

建築家 安藤忠雄氏，株式会社ニトリホールディングスを始めとする企業，個人の方々からの寄付金を基金とし，経済的に困窮しながらも意欲ある学生を支援するCreate the Future Project（以下，CFプロジェクト）を立ち上げ，5月27日（木）に記者会見を行いました。

CFプロジェクトは，高い向学心と研究マインドを有し，グローバルな活躍を志す京都大学の学生（学部，修士課程，博士課程）に対し，経済的な困窮や将来の不安を理由にその向学心を途絶えさせない経済的支援として，返済不要な奨学金の給付を行うものです。2022年4月より奨学金の給付を開始し，次世代を担う人材（創造的研究者・高度な専門能力を持つ者）を育成し，社会に輩出することをめざします。

会見では，安藤氏，似鳥昭雄 株式会社ニトリホールディングス代表取締役会長からCFプロジェクトに対する思いが述べられました。また，湊 長博 総長からは，安藤氏および似鳥会長両氏の本学の教育活動に対する深い理解と格段の支援に対して，お礼が述べられました。



左から，似鳥会長，安藤氏，湊総長

（総務部（渉外課））

[目次に戻る](#)

京都大学春秋講義（令和3年度春季講義）のオンライン講義を公開

京都大学春秋講義は，京都大学における学術研究活動の中で培われてきた知的資源について，広く学内外の人々と共有を図るため，1988（昭和63）年秋から開講している公開講座です。

前回に引き続き，今回も新型コロナウイルス感染拡大防止のため，4月26日（月）より7月30日（金）までオンラインにて配信しました。メインテーマを「恐れ・無知・合理性」として，高谷知佳 法学研究科准教授から「『恐れ』を歴史から読み解く」，阿部修士 こころの未来研究センター准教授から「意思決定を支える脳のメカニズム－道徳的判断の研究事例から－」



講義を行う高谷准教授

大学の
動き

と題した講義を行いました。

全国から1,500名を超える申し込みがあり、参加者からは、「歴史や脳など新たな側面から考えられて、ためになった」、「コロナ禍に即した興味深い内容で面白かった」、「このご時世、自宅にいて知識の幅を広げられるのは有難い」などの声が寄せられました。

なお、当配信は配信期間終了後も「京都大学YouTubeチャンネル」にて公開しています。

【関連リンク】

「恐れ」を歴史から読み解く（京都大学春秋講義（令和3年度春季講義））

https://youtu.be/TRTXcq01_pA

意思決定を支える脳のメカニズムー道徳的判断の研究事例からー（京都大学春秋講義（令和3年度春季講義））

https://youtu.be/Gc_w4mxpZyE



講義を行う阿部准教授

（総務部（渉外課））

[目次に戻る ↗](#)

第78回京都大学未来フォーラムを開催

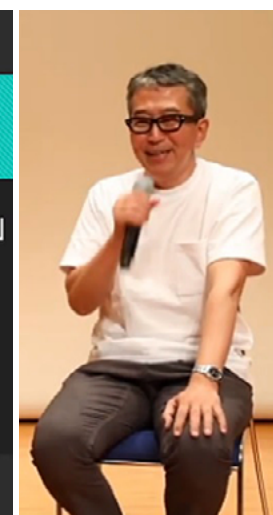
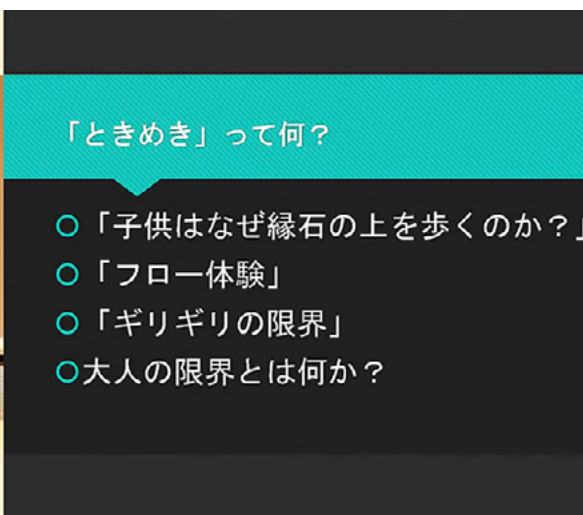
第78回京都大学未来フォーラムを6月11日（金）に、文学部出身で、演出家・プロデューサーの小松純也氏を講師に迎え開催しました。今回、初めて中継ライブ配信としました。

「わからないものとの戦い ～「気分」と「イノベーション」の狭間で～」と題した講演で、小松氏は、「チョコちゃんに叱られる!」などのヒット番組が生まれるに至った経緯に触れ、ヒットを生み出すために重要なのは、自分の「ときめき」に気づくことであると述べました。そして、時代の気分を測るには自分の「直観」がセンサーであり、それを磨くには、自分に正直に向き合うことが大切だと語りました。

質疑応答コーナーでは「制作されたコンテンツの中で大学時代の経験がきっかけになったものは?」などの質問が寄せられました。最後には視聴者に向けて「アマチュアリズム」というメッ



講演をする小松氏



質疑応答の様子

大学
の
動き

セージとともに、自分を決めつけず、どんなものにも新鮮な気持ちを持ち続けることで、いろいろなことが乗り越えられるのでは、と締めくくりました。

講演後、視聴者からは、『世界で一番普通の人になること』、それがヒットの秘訣という言葉が印象に残りました、「日々をどのように捉えていくのがよいのかということのヒントになりました」、「オンラインで実施してくださり参加しやすかったです」などの感想が寄せられました。

【関連リンク】

第78回京都大学未来フォーラム 講師：小松 純也 氏（演出家・プロデューサー）

<https://www.youtube.com/watch?v=eLgfb3PWAHw>

（総務部（渉外課））

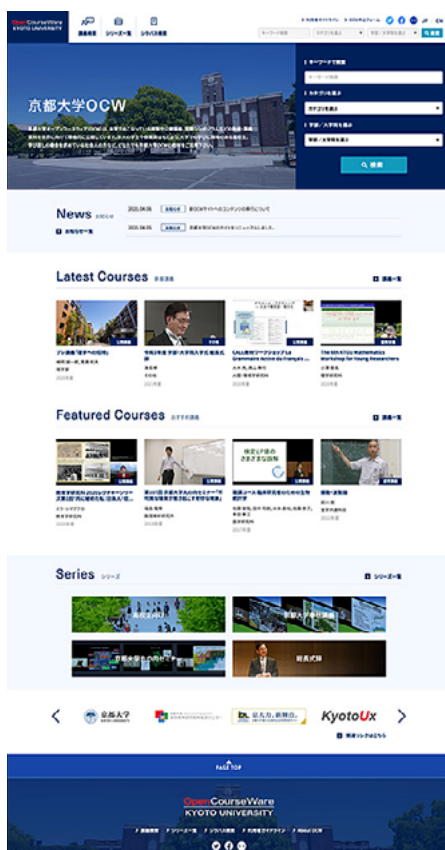
[目次に戻る ↗](#)



京都大学 OCW ウェブサイトのリニューアルを実施

高等教育研究開発推進センターは4月5日(月)、本学で行っている授業や公開講座、国際シンポジウムなどの映像や教材、関連資料等を一般公開している京都大学オープンコースウェア(OCW) (<https://ocw.kyoto-u.ac.jp>) ウェブサイトをリニューアルしました。

今回のリニューアルでは、目的の講義や教材を効率的に探し出せるよう検索機能を充実させるとともに、スマートフォンやタブレット端末でも閲覧しやすいレスポンスデザインを採用しました。特に検索機能では、学問分野やキーワード等の複数項目による横断検索が可能になり、興味のある講義や教材を容易に見つけることができるようになりました。また、サムネイル画像を表示するチャプター機能により、講義映像を見たいシーンから視聴できるようになりました。



京都大学 OCW トップページ

京都大学 OCW では、昨年度から日・英両言語で全学のシラバスを公開しており、シラバスの詳細検索も可能となっています。

京都大学 OCW では引き続き、本学における授業での活用や教育活動の国内外への発信のため、授業映像やオンライン教材を積極的に公開していく予定です。

聴講コース 臨床研究者のための生物統計学



本コースは定額制となっており、ランダム化や中位といった基本から検出スコアなど実践的な内容まで臨床研究に必要な生物統計の考え方を分かりやすく解説します。



講義ページ

(高等教育研究開発推進センター)

[目次に戻る](#)

火山研究センター復旧記念式典を挙行

熊本県南阿蘇村にある理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センターは、2016年熊本地震本震により被災し、本館は沈下して基礎が大破したほか、壁の一部が崩れて計測器などが損壊するなどの被害が出ました。そのため、2017年4月から阿蘇市一の宮町坂梨に仮研究棟を置き、研究・教育活動を続けてきましたが、2021年2月に復旧工事が完了し、同年3月から現地で業務を再開しました。



開会挨拶をする大倉敬宏 理学研究科附属地球熱学研究施設長

部局の
動き

このたび、同センターの復旧を記念し、5月10日（月）に式典を挙行了しました。オンラインでの参加を含め、学内外の関係者約30名が出席しました。

式典では、吉良清一 南阿蘇村村長や佐藤義興 阿蘇市長らより祝辞があり、その後、復旧工事の終わった館内の見学を行いました。



熊本地震本震により火山研究センター周辺で発生した地すべり等の説明



センター周辺の復旧工事見学の様子



現地参加者の集合写真

（理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター）

[目次に戻る](#)

Psyche Navigation System（サイキ・ナビゲーション・システム）という新たなテクノロジーの開発を開始

熊谷誠慈 こころの未来研究センター准教授，上田祥行 同特定講師，栗野皓光 情報学研究科准教授，三浦典之 大阪大学教授らの研究グループは，伝統知とサイエンスの循環的融合を通じて，人のこころを伝統知から抽出された理想状態に導く補助をすべく，Psyche Navigation System（サイキ・ナビゲーション・システム）という新たなテクノロジーの開発を始めました。

被計測者に計測されていることを意識せず心状態を捉える不察知心理計測技術，五感を刺激してこころを理想の状態に導く心理アクチュエーション技術を駆使して，人のこころが伝統知から抽出された理想状態に至るためのサポートをします。本技術がオープン・イノベーション・プラットフォームとなり，新たな学術，文化，産業の創出も期待されます。ただし，誤用や悪用等により，ユーザーを誤った道に導く可能性もあり，一般公開には事前の慎重な配慮が必要です。

本技術に関わる調査研究は，科学技術振興機構（JST）のムーンショット型研究開発事業，新たな目標検討のためのビジョン策定（ミレニア・プログラム）で採択されました。5月14日（金）には研究発表の記者会見を開催し，5月22日（土）には本技術の詳細を公表するとともに，本技術を活かせる場面や懸念される観点などを検討するために，シンポジウム「極限状態におけるこころのあり方」を開催しました。シンポジウムでは，ノーベル賞受賞者や宇宙飛行士，プロアスリートも交えて議論を行いました。

部局の
動き



Psyche Navigation System のイメージ図

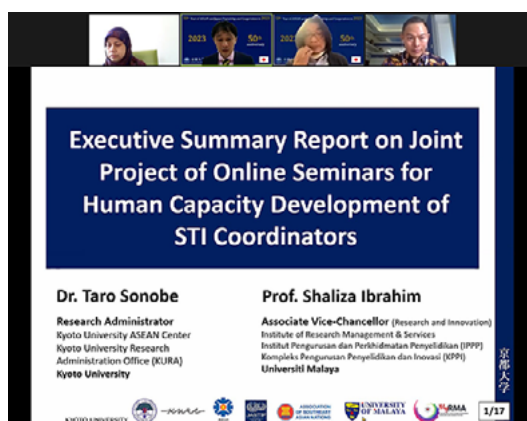
(こころの未来研究センター)

[目次に戻る](#)

URA が第 79 回 ASEAN 科学技術イノベーション委員会 (ASEAN COSTI-79) にて, STI Coordinator 育成に関する発表を実施

6月16日(水), オンラインで開催された第79回ASEAN科学技術イノベーション委員会(ASEAN COSTI-79)の公式プログラムに, 本学から, 園部太郎 URA・ASEAN拠点副所長と, 斎藤知里 URAが招かれ, 日ASEAN間での国際共同プロジェクトを支援するSTI Coordinator育成に関する発表を行いました。

ASEAN COSTI-79とは, ASEAN事務局および加盟10カ国の科学技術関係省庁の次官級代表者が集うASEANの公式会合です。また, STI Coordinatorとは, さまざまなステークホルダー間を橋渡し, 国際的なプロジェクトの推進に不可欠なURAを含む国際共同プロジェクトのコーディネート人材の総称です。



オンライン会議の様子



園部 URA・副所長による発表



当日は「Executive Summary Report on Joint Project of Online Seminars for Human Capacity Development of STI Coordinators」と題し、園部URA・ASEAN拠点副所長が、日ASEAN間での研究支援に従事するSTI Coordinator育成に関する共同プロジェクトの成果について発表を行いました。

発表後、議長国を含めた複数国の代表より、本学が主導して共同プロジェクトを終えたことに関する謝辞が述べられ、日ASEANの協力によるSTI Coordinator人材育成の推進に対して、期待と極めて好意的な反応がありました。本学URAが世界に先駆けて主導してきた提案は、翌17日に開催された第11回非公式ASEAN科学技術大臣会合の共同メディア声明で明記されました。

本学ASEAN拠点は、「日ASEAN科学技術イノベーション共同研究拠点-持続可能開発研究の推進-」(JASTIP)などの多国間共同プロジェクトで培った人脈や信頼関係を活かして、本学の重点地域であるASEANとの相互発展へ今後とも貢献していきます。



報告書

【関連リンク】

日ASEAN科学技術連携を担うコーディネート人材養成を目指したKURAの取組について

<https://www.kura.kyoto-u.ac.jp/support/tsunagari/jinzaiyousei/>

Science, Technology and Innovation (STI) Coordinators in Japan and ASEAN towards Grand Challenges (2020-2021): Summary Report

<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/263214>

第11回非公式ASEAN科学技術イノベーション大臣会合の共同メディア声明(6月17日)

https://asean.org/storage/0000-Adopted-JMS-of-IAMMSTI-11-for-COSTI-79_17June2021-11206.pdf

(学術研究支援室)

[目次に戻る ↗](#)

寸言

「地球の危機をチャンスに変えよう」

中江 公人



もう半世紀近く前になるが、当時、私は、吉田神社の参道入り口に立つ大きな鳥居の脇にある、タバコ屋さんの2階に下宿していた。部屋の窓を開けると、京大の時計台が間近に見える、おそらく京大法学部生のなかで、教室まで最短距離で通える学生だっただろう。その分、友人たちのたまり場になったし、朝、授業に向かおうとするところを鳥居で待ち伏せされ、そのまま参道沿いにある雀荘に連れていかれたこともあった（すみません！）。ゆったりとした時の流れのなか、いろいろな学びや友との語らいを通じて、自分の人格の基が形成されていった。京都大学は、私にとって、「心のふるさと」というべき特別の場所である。

新型コロナウイルスとの長い闘いが続いている。この間、保有資産10億ドル以上の超富裕層が2千人余り増える一方で、感染防止に必要な手洗いの設備を持たない人々が約30億人もいるという。富の格差が命の格差をももたらしている。

我が国も、非正規雇用で働く人たちなど、社会的に弱い立場にある人々に対する社会のセーフティネットの脆弱さが浮き彫りになった。

他方、地球温暖化で1年間に融けた北極圏の氷を東京23区に流し込むと、スカイツリーをはるかに超える水位になるとの衝撃的な報告がある。

今、地球があちこちで悲鳴をあげている。それは、このままでは、私たちの経済社会は持続可能なものではないぞという警告と思えてならない。

しかし同時に、私たちは、より良い社会、より良い世界の実現に向けて舵を切るチャンスを与えられてもいるのだ。それは単に、デジタル化を進めるとか、ニューノーマルな社会を構築することではない。

私たちが今、めざすべきは、SDGsの掲げる持続可能で「誰ひとり取り残さない」包摂的な社会の実現である。

そしてそれは、ジャック・アタリ氏の提起する「利他主義」の下、人々が、分断ではなく「連帯」を選択することで、多様性を認め合う「寛容さ」を持つことでこそ達成できるものだ。

私に関わる金融の分野においても、SDGsの一環として、ESG（環境・社会・ガバナンス）を重視したマネーの流れが、世界の潮流になってきている。

以前、「バレンタインチョコレートを買って社会貢献」という記事が出ていたが、児童労働をさせていない産地のチョコレートを買おうという活動を紹介したものだ。社会のために何かをしたいと考える顧客や消費者と、そのための「役割と舞台」を提供しようという企業や生産者との間に、これまでの関係を超えた、互いの「共感」によって生じた連帯が進みつつある。

SDGsは、世界の共通言語であり、誰もが主役となりうる。私たち一人ひとりが自分事と



して、SDGsに取り組むことが大事だ。自分たちの足許の取組み，地域での取組みが世界レベルの課題と線で結ばれている。一つひとつは小さな一歩でも，その思いをつないでいけば，やがて社会を変える大きな力となるだろう。そのつなぐ輪のなかで，独創的なアイデアと豊かな知見の宝庫たる京都大学と，面白いことの大好きな京大生が大きな役割を発揮されることを期待したい。

(なかえ きもと，全国労働金庫協会・労働金庫連合会理事長，昭和 51 年法学部卒)

[目次に戻る ↗](#)

随 想

多様性を楽しむ

名誉教授 吉川 左紀子



2021年4月、京大から車で10分ほどの距離にある、瓜生山学園京都芸術大学の学長職に就いた。

先日、コロナ禍で人の少ない大学のキャンパスを歩きまわってみると、13の学科、それぞれの演習室の様子が多様性に驚いた。私の頭の中にある「芸大生」のイメージは、彫像のデッサンをしたりキャンパスに向かって絵筆をとる「画家の卵たち」の姿。もちろん、今も芸大で絵画を学ぶ学生たちは多いが、21世紀の芸大生は、マンガ、イラスト、建築デザイン、服飾デザイン、演劇、映画撮影、文化財修復、幼児教育、美術作品のキュレーションなど多種多様な分野で学んでおり、「芸術、アート、デザイン」のジャンルは本当に幅広い。それぞれの学科の研究室も、古い時代の庭園の復元や文化財修復に取り組む歴史遺産学科では考古学や歴史学の書籍、古文書が本棚に並び、イラストやデザイン領域の学科では最新鋭の映像デジタル機器が並ぶ、といった具合である。芸術の世界での時間、空間の広がり、私の想像をはるかに超えていた。

去年はオンラインの授業が多く、大学の先生がたや学生たちと直接話しをする機会も少なかった。学長職に就くことへの打診があったとき、芸術の専門家でもない私が、と逡巡した。「やってみよう」と決心することができたのは、京大時代に所属したこころの未来研究センターでの経験が活かせるかもしれない、と思いあたったからである。

こころの未来研究センターは、心理学（実験系、臨床系）、脳科学、宗教学、公共政策、美学など異分野の研究者が集い、「こころ」について多様なアプローチで研究を行い、その成果を社会に発信することをめざしている。設立当初は、主要な研究テーマをひとつに絞って、皆で取り組んでみてはどうかというアドバイスを頂いたが、研究分野が違えば研究の方法論も異なり、どうもうまくいかない。そこで、各自が自分の取り組みたいこころの研究プロジェクトを企画して、のびのびやってみようという方針に変えた。さらに、学際組織は、多様でありながらつながっている状態の「居心地よさ」を作ることがポイントであり、それには雑談を含めた日頃のコミュニケーションの時間が不可欠であることも分かってきた。

こころの研究と同様に、芸術の世界の多様性も半端ではない。つながりという意味がなければ、ばらばらのままである。それでもキャンパスで雑談をしていると、「他学科の様子をもっと知りたい」「他学科の授業にでてみたい」という期待や希望を多くの教員や学生たちがもっていることが分かる。私がこころの未来研究センターで図らずも身につけてきた「つながりスキル」は、そこに「創造性を育む」「制作へのモチベーションを高める」といった要素を加えることで、芸術大学での仕事にも十分に役立ちそうである。多彩な経歴の先生がたとの雑談の時間を大切にしながら、新しい仕事に取り組んでいきたいと考えている。

（よしかわ さきこ、平成31年退職、元こころの未来研究センター教授、
専門は認知心理学）

[目次に戻る ↗](#)

洛書

学際分野における
人との出会い

鎌田 真由美



バイオインフォマティクス（生命情報学）は、生物学（biology）＋情報学（informatics）で、対象範囲が果てしなく広い学際分野です。概念自体は1980年代後半くらいからあると言われていますが、講義の最初に「バイオインフォマティクスを聞いたことがありますか？」と聞くと、ほとんど手が上がらないことがありました。最近は高校などでもお話いただくことがあるようで、聞いたことがある、と答えてくれる学生も増えてきたように思います。

私がバイオインフォマティクスに出会ったのは学部の卒業研究でした。もともと人の身体の仕組みを知りたく、生命科学に興味がありましたが、幼い頃からパソコンに触れる機会があり、電子デバイスや計算機にも興味がありました。ふとしたきっかけで、情報科学科に入学、これまたふとしたきっかけ（教授の一言）で、バイオインフォマティクスに出会いました。生命の複雑なメカニズムを、計算機を使って紐解く、なんと魅力的なのだろうと思いました。当時、周りには専門とする教員もいなかったため、博士課程から、本領域を代表する研究者を多く輩出している、本学化学研究所 バイオインフォマティクスセンターで学びました。先述の通り、バイオインフォマティクスは、対象範囲が多様です。ゲノムからタンパク質の立体構造レベルまでの様々なスコープで、ヒトを対象とする研究から蝶や線虫、細菌を対象とする研究まで。もちろん、実験を軸とした研究もあれば、解析アルゴリズムに関する研究もあります。まさに多様です。センターでの研究活動やイベント、学会参加を通し、それぞれの対象に応じてコアな知識を持つ研究者と出会うことができ、学際領域に身を置くことの楽しさ、やりがいを実感しました。

その後、より人に関する研究をしたい、との想いもあり、ご縁から、現在の医学研究科 ビッグデータ医科学・バイオメディカルデータサイエンス分野に着任いたしました。高度医療専門職としての医療データサイエンティスト・バイオインフォマティシャン育成を担う研究室です。私のような情報学出身者もいれば、臨床医やごりごりの数理学者、生物、薬学、工学、物理学出身者の研究者など、多種多様な人材が集まり、共通の目的に対して最大限の結果を出すために各々の知識を出し合い、教育、研究を行っています。

本分野設立の背景にもあるように、医療・ヘルスケア領域におけるデータサイエンス活用を訴えるものを至る所で目にします。一方、データ解析プラットフォームの自動化は進んでおり、とりあえず何かやろうと思えば、誰でもそれなりに何かができるような状況になりつつあります。ただ、当然ですが、データの解析はあくまで手段であり、何を明らかにするために行うのが重要です。その適切な問題設定にはデータとその背景を深く理解する必要があり、現在取り組む人材育成においても、専門性、ドメイン知識を有することの重要性を改めて感じています。その意味でも、医学部の中に、本分野のようなデータサイエンスを行う

洛書

領域があることは非常に大切であると実感しております。学際領域特有の困難さを感じることもありますが、本学では、互いを尊重し最大限の結果を出す、それができる環境にあります。多様な人材がいる本学での様々な出会いに感謝し、学生にも研究の楽しさを伝えていけるよう、知識を深化し知見を広げていきたいと思っています。

(かまだ まゆみ, 大学院医学研究科准教授,
専門はバイオインフォマティクス・医療データサイエンス)

[目次に戻る ↗](#)

栄
誉

岩井一宏 医学研究科教授が日本学士院賞を受賞

岩井一宏 医学研究科教授が日本学士院賞を受賞し、授賞式が6月21日（月）に日本学士院で行われました。

岩井教授は、平成4年に京都大学大学院医学研究科を修了し、医学博士の学位を取得しました。その後、京都大学医学部附属免疫研究施設助手、米国国立保健研究所（NIH）研究員、京都大学大学院医学研究科助手、助教授、同大学大学院生命科学研究所助教授、大阪市立大学大学院医学研究科教授、大阪大学大学院生命機能研究科・大学院医学系研究科教授を経て、同24年に京都大学大学院医学研究科教授に就任、細胞機能制御学分野を担当し、現在に至っています。



今回の日本学士院賞の研究題目は、「直鎖状ユビキチン鎖の発見とその炎症応答制御に関する研究」です。岩井教授は、新奇な直鎖状ユビキチン鎖と特異的な生成酵素であるLUBAC（ルーバック）を発見してその機能、疾患への関与を解明しました。ユビキチンは生命現象を担う機能分子であるタンパク質を分解に導くシグナルであると考えられていましたが、岩井教授はまず、LUBACによって生成される直鎖状ユビキチン鎖がタンパク質分解ではなく、炎症応答制御をはじめとして、細胞生存などの多くの生命現象に中核的に寄与することを解明しました。さらに、直鎖状ユビキチン鎖の生成減弱が免疫不全を伴う自己炎症性症候群、その生成亢進がB細胞リンパ腫の原因となることも明らかにしました。加えて、多くの病原微生物が宿主に感染する際にはLUBACを抑制することなども判明しています。岩井教授の研究はユビキチン、免疫応答制御機構の分野に新機軸を提供したのみならず、感染症、悪性腫瘍、免疫疾患の治療など、医学に新しい可能性を提示するものです。

なお、岩井教授の卓越した業績に対し、平成27年日本医師会医学賞、同29年持田記念学術賞、令和元年武田医学賞、同2年上原賞など、多数の賞が授与されています。

（大学院医学研究科）

[目次に戻る ↗](#)

話題

令和2年病院長賞表彰式を挙

医学部附属病院は、5月11日（火）に病院長賞表彰式を挙

この病院長賞は、本院における教育、研究、診療、管理運営等について、極めて顕著な貢献があったと認められる若手教職員または診療科等を表彰する制度として設けたものであり、個人および団体の推薦の中から2組の受賞者を決定・表彰しました。

表彰式では、宮本 享 病院長より、2組の受賞者および受賞内容について発表があり、表彰状が授与されるとともに、祝辞が述べられました。

令和2年病院長賞受賞内容

①新型コロナウイルス感染症対応部門

新型コロナウイルス感染症の流行下にあつて、重症患者受入医療機関として対応するに当たり、中心となって具体的な対策・方針を考え、診療体制の維持に尽力しました。

京都府、京都市等の行政組織や地域の医療機関と連携し、高度先端医療・救急医療と感染症医療の両立に取り組みました。

なお、受賞部門については以下のとおりです。

感染制御部、検査部（PCR検査関係者）、北病棟1階・南病棟7階（支援病棟：Ki-CONNECT病棟含む）、中病棟1階（支援病棟：南病棟2階、南病棟8階、手術部含む）、中病棟3階、中病棟4階、呼吸器内科、初期診療・救急科、麻酔科、ECMOチーム、薬剤部、放射線部、リハビリテーション部、新型コロナウイルス感染症対策事務メンバー

②次世代医療・iPS細胞治療研究センター

早期医療開発専用施設である「次世代医療・iPS細胞治療研究センター(Ki-CONNECT)」を開設し、がんや難治性疾患、iPS細胞を用いた疾患領域などの早期臨床試験の円滑な実施を可能とする体制を整備しました。



受賞した団体の代表者と宮本病院長（中央）

（医学部附属病院）

[目次に戻る](#)

話題

新入生 3000 人にライブ型オンライン救命講習会を実施

本学では、2015 年から全学部新入生に対して、新入生ガイダンスの際に40分間の心肺蘇生・AED 講習会を行っています。2020 年度は新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の影響で実施できませんでしたが、その後1年間、実施方法について試行錯誤をして2021年度は初めてオンラインでライブ配信の講習会を4月2日(金)、5日(月)、6日(火)に行いました。

ライブ配信については、3,000人の新入生を学部(学科)ごとに12のグループに分け、グループごとにZoomを立ち上げました。国際高等教育院棟の部屋で、インストラクター役の教員が教材用DVDを用いて胸骨圧迫やAEDの使い方を指導している様子をビデオカメラで撮影し、その映像を同時に2つのZoomへ分配して配信しました。1回の講習で約500名(1つのZoom会議室は250名前後の学生と教員がログイン)、これを1日2回、3日間かけて合計6回講習会を行うことで、新入生全員に指導をしました。

対面で講習を行っていたときには、胸骨圧迫のトレーニングキット「あっぱくん®」を使っていましたが、今回は自宅の体重計の上にクッションを置いて、胸骨圧迫の際に必要な力のかけ方を体験してもらいました。成人の胸を5cm圧迫するには30kgの荷重が必要とされており、30kgを目標に圧迫するよう体験してもらいました。力のかけ具合を可視化できた点は学生に好評でした。

またZoomのブレイクアウトルーム機能を使い、学生10名に対して教員1名のグループに分け、オンラインでも胸骨圧迫のスキルを体得できるよう少人数型の演習も取り入れました。

講習会後のアンケートでは、98.1%の学生が、「心停止場面に遭遇した際の救命行動を理解することができた」と回答しました。さらに84.4%の学生が、「心肺蘇生の講習会をZoomで行うことに有意義」と回答しました。今回初めてライブ配信による胸骨圧迫とAEDの使い方の指導が実現できた背景には、情報環境機構による全面的なバックアップが得られたこと、自宅で用意できる資材を教材にしたこと、Zoomのブレイクアウトルーム機能を活用し、学生10人につき教員1名、のべ388名ものサポート教員の協力が得られたことが挙げられます。学生のアンケート結果を含め写真入りの詳しい報告書は関連リンクにあるホームページに掲載してあります。

今回のオンライン講習会を含めて、この6年で約18,000人の本学の学生が胸骨圧迫とAEDの使い方を学んだことになります。毎年すべての新入生を対象に継続して胸骨圧迫とAEDの使い方を教育している大学は日本中どこにもなく、京都大学のユニークな取り組みです。次年度以降、COVID-19感染が終息していることを祈りつつ、この取り組みを継続できるように準備していきたいと考えています。

今回のオンライン講習会を含めて、この6年で約18,000人の本学の学生が胸骨圧迫とAEDの使い方を学んだことになります。毎年すべての新入生を対象に継続して胸骨圧迫とAEDの使い方を教育している大学は日本中どこにもなく、京都大学のユニークな取り組みです。次年度以降、COVID-19感染が終息していることを祈りつつ、この取り組みを継続できるように準備していきたいと考えています。

【関連リンク】

3000人の新入生がライブ型オンライン救命講習会で胸骨圧迫とAEDの使い方を学びました！

<https://u.kyoto-u.jp/pdx1g>

(国際高等教育院)

[目次に戻る](#)



講習時、学生が見ていた Zoom の画面

訃報

このたび、長尾 真 元総長・名誉教授、河合雅雄 名誉教授が逝去されました。
ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に両氏の略歴、業績等を紹介します。

長尾 真 元総長・名誉教授

長尾 真先生は、5月23日に逝去されました。享年84。

先生は、昭和34年3月に京都大学工学部電子工学科を卒業後、同36年3月同大学院工学研究科修士課程電子工学専攻を修了され、同工学部助手、講師、助教授を経て、同48年10月に教授となり、有線通信工学講座を担当、平成8年4月大学院工学研究科に配置換えとなり、通信情報工学講座言語メディア工学分野を担当されました。昭和61年京都大学大型計算機センター長、平成7年附属図書館長、同9年工学研究科長・工学部長の要職を経て、同9年12月から同15年12月までの6年間、第23代京都大学総長を務められたのち、京都大学名誉教授の称号を受けられました。



先生は、永年にわたり情報学、特にパターン認識、画像処理、自然言語処理、機械翻訳、電子図書館に関する研究、教育に精励され、多くの研究業績をあげられました。パターン認識の分野では初期の郵便番号の自動読み取り装置に使われたオートマトンモデルを用いた手書き文字の認識、画像処理の分野では世界に先駆けてフィードバック解析機構を導入した顔画像認識、自然言語処理の分野では現在日常的に使われている日本語ワープロや文献検索システムなどの基となる日本語の形態素解析法、重要語抽出法、機械翻訳の分野では昭和57年から4年間科学技術庁の機械翻訳プロジェクトを推進するとともに、アナロジーによる機械翻訳という新たな翻訳方式を提案されました。また、日本認知学会会長、アジア・太平洋機械翻訳協会会長、電子情報通信学会会長、言語処理学会会長、情報処理学会会長等多数の学会の要職を歴任し、学界の発展に大きく貢献されました。先生の研究成果はいずれも国内外で高く評価され、その業績に対して平成5年IEEE Emanuel R Piore賞、同9年電子情報通信学会功績賞、情報処理学会功績賞、紫綬褒章、同10年人工知能学会業績賞、同15年国際計算言語学会（ACL）Lifetime Achievement Award、同17年日本国際賞を受けられています。

京都大学総長に在任中は、大学内の諸問題の解決に尽力されました。大学運営・管理体制の改革としては、副学長および総長補佐の設置ならびに学内に分立していた情報関係部門を学術情報メディアセンターへ統合されました。また、平成16年4月からの国立大学の法人化に当たっては、国立大学協会会長として円滑な国立大学法人制度への移行に向けて尽力されました。教育・研究組織の整備としては、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、情報学研究科、生命科学研究科、地球環境学堂・学舎といった従来の学問の枠を越えた先進的かつ意欲的な教育・研究を行う独立研究科を設置するとともに、再生医科学研究所の設置は、その後のiPS細胞の発見など我が国を代表する優れた成果に繋がりました。教育改革・研究

訃報

推進としては、学部を越えた全学共通教育を実施するため高等教育研究開発推進機構および高等教育研究開発推進センターの設置ならびに産官学連携の推進のため国際融合創造センターを設置されました。キャンパスの移転及び整備については、本学の永年の課題であった新キャンパスの実現に向け学内の意思統一を図り、京都市西京区の地に、最先端の研究を行い景観や環境にも配慮した地域社会と協調する桂キャンパスを実現されました。

本学を退職後は、情報通信研究機構理事長、国立国会図書館長、国際高等研究所長、京都府公立大学法人理事長等、多くの要職を歴任されました。また、教育研究や大学行政等における顕著な業績が評価され、平成20年に文化功労者に選ばれ、同30年に文化勲章を受けられました。

以上のように、先生は、永年にわたりその専門学識によって学問分野において多くの功績を残すとともに、卓越した識見と温厚なる人格により、教育研究、大学の管理運営、学術の振興発展等に多大な貢献をなされました。

[目次に戻る ↗](#)

河合 雅雄 名誉教授

河合雅雄先生は、5月14日に逝去されました。享年97。

先生は、昭和27年3月京都大学理学部動物学科を卒業後、同年4月から同28年7月まで同大学大学院在学、同28年5月兵庫農科大学助手、同31年7月名古屋鉄道株式会社嘱託、同年10月財団法人日本モンキーセンター専任研究員、同37年8月同センター生態研究部長、同動物部長、同42年10月京都大学霊長類研究所助教授を経て、同45年8月同教授に就任し、生活史研究部門を担当されました。この間、昭和37年3月には理学博士の学位を京都大学から授与されました。昭和53年1月から同57年1月まで京都大学霊長類研究所長、同44年から同54年までに約6年間同研究所附属幸島野外観察施設長を歴任、同62年3月、停年により退官し、京都大学名誉教授の称号を受けられました。

本学退官後は昭和62年4月から平成3年3月まで愛知大学教養部教授、平成3年4月から同8年3月まで日本福祉大学社会福祉学部特別任用教授、平成7年7月から同15年3月まで兵庫県立人と自然の博物館長を務められました。その間、昭和62年5月から平成6年4月まで財団法人日本モンキーセンター所長、平成7年4月から同11年3月まで日本福祉大学生涯学習センター長を兼務されました。

先生は、永年にわたって、動物生態学並びに霊長類学の研究と教育、後進の指導に努められるとともに、京都大学霊長類研究所及び財団法人日本モンキーセンターの設立に尽力し、所長として同研究所、同センターの育成の責を果たされたほか、兵庫県立人と自然の博物館長として博物館の国際交流活動を大きく発展させるとともに、博物館の活動や運営体制などの強化・拡充に向けた改革を主導し、博物館がさらに飛躍するための礎を築かれました。

先生の永年にわたる研究は、動物生態学、霊長類学、人類学、アフリカ学の広い範囲にわ



訃報

たりますが、特にニホンザルの生態学的研究、ニホンザルの文化的行動の社会学・行動学的研究、樹上性霊長類の生態学的研究、ヒヒ類の社会学・生態学的研究、霊長類の生態・社会・行動様式からみたヒト化（ホミニゼーション）の研究などが、国内外から高い評価を受けています。

また、これらの教育研究における顕著な業績が評価され、平成2年に紫綬褒章、平成7年に勲三等旭日中綬章、平成16年に日本学士院賞エジンバラ公賞を受けられました。

（霊長類研究所）

[目次に戻る ↗](#)

京大広報
No.757

令和3年7月31日発行

発行 京都大学総務部広報課
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
E-mail:kohho52@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

※ご意見・ご感想をお寄せください。
「京大広報」の既刊号は、次のURLでご覧いただけます。
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/public/issue/kouhou/>

京大125周年、新輝点。



京都大学は2022年に創立125周年を迎えます
URL : <https://125th.kyoto-u.ac.jp>